

農村開発・環境保全

3年前の高原野菜とゴムの木等の植林事業
- 当面の現金収入は、バナナとコーヒーに期待 -

プランテーションの拡大が続くティボリ町のスプとフィタック地区で、農業資本に畑を貸さずに、収入向上をめざす選択、高原野菜と樹木作物、在来種植林を組み合わせたモデル事業（日本国際協力財団助成）を実施して3年になります。

前回、約半年前には、野菜畑の多くがコーン単作に戻ってしまっていたことに触れました。今回の6月訪問で確認できたのは、収穫が始まったバナナ、コーヒーを確実に収入向上に繋げる動きです。特に、コーヒーは、手作業での焙煎や袋詰めを始めていました。

しかし、有機栽培というだけで、地元市場の競争に勝ち抜くのは大変です。担当のマーク神父からは、ジャコウネコによる希少なコーヒー作りの計画も聞きました。CMIPとの協働事業では、神父の熱意だけが空回りして、成果につながらないことがあるため、改めて、時間をかけての住民組織化をお願いしました。

現地でもいただいたスプのコーヒーを事務局で試飲してみました。スタッフのコメントは、「酸味が少なく、癖がない」です。

HANDSはまだ、イベントで食品を売る場合の手続き、その他のノウハウがありませんが、地元の朝市で、「ミンダナオの有機栽培コーヒー」のラベルを貼って並べてみました。

500g入（写真）は試飲用には大きすぎたようです。次回は小袋にしてみます。



事業モニターの心強い助っ人エンリコさん
- タシマン村シエテの森林農業 -

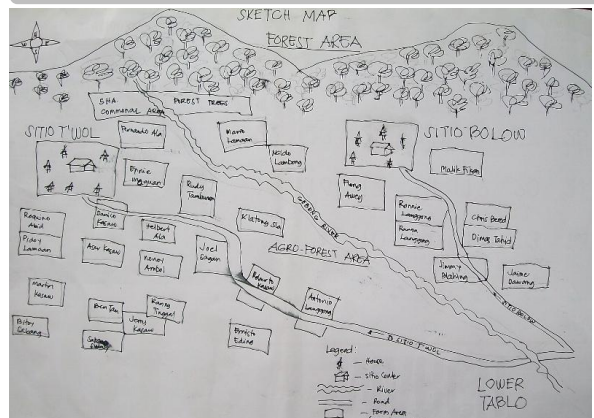
受益者総数20人中、少なくとも7人の畑を訪ねたいと、PFPに依頼しておいたところ、シエテでは、先住民族学校/ILS教師、エンリコさんが、手書きの受益者リストを手迎えてくれました。受益者にはILSの父母も多く、顔見知りのため、雨の中でしたが、効率よく、それぞれの畑を回ることができました。



PFPのニックさん、サムソンさん、いずれも数多くのアグロフォレストリーの経験があり、よい指導者ですが、やはり、事業地域をよく知る地元の教師等と一緒に歩く方が、進捗状況把握には有利です。

このタシマン村シエテは、3月訪問時には、長引く乾季のさなかで、食べ物もないため、人心も荒れていて危険といわれた地区です。今回は軍の兵士の姿はなく、毎日のスコールで、コーンも根菜類もよく育っていました。そのため、よく伸びたコーン畑の中に、植えたばかりのコーヒーやゴム苗木を確認するのは大変でした。事業が終了する9月末には、20世帯の各1haに、コーヒーとゴム苗木が育ち、保護区内の10haには、ナラ、ナボル、ラワンなどの在来種苗木3,000本の植栽が完了する予定です。（三井物産環境基金助成）

ラムダラグ村3年目の事業が始まりました



「ダグマ山系ラムダラグ村の生態系保全のための森林農業推進事業」は1年目のタブロ、2年目のラムカニダンに続き、3年目はタウォル、ボロウの2地区で実施の予定で、これまで以上に、モニターが複雑になるため、PFPには、実施地区の概要を示す図を要請しました。前2年と同じく、合計30世帯の各1haにコーヒーやゴム苗木を植え、町が保護区と定める急傾斜地5haには、在来種苗木2500本を植えることにしています。（国土緑化推進機構助成）

ボルール村BOSDAのゴム苗木の現況報告から

7月初め、農業指導者ボニファシオから「3,200本のうち、65%は順調に成長しているが、35%は枯死した」との報告がありました。

ボルールでは、ゴム苗木を種から育てました。芽接ぎ（82号原版の芽出しを修正）苗木使用のPFPによると、種からのものは、単価は安いですが、干ばつへの耐性や、6・7年で採取が始まる樹液の質の面で、芽接ぎ苗木より劣ることがあるそうです。

PFPと接点のあるボニファシオには、今後もその助言を受けての適正な苗木管理を期待しています。



1年足らずで、背丈を越えるほどに成長したゴムノキ